



アスター・プリンセス

草花二二三

原秀雄

がてそれが農村の普通の姿となつて全国また全国に及んだ時には、

わが国の文化もきわめて高度の域に達することと思う。

さて春は樹木草本を植付けた

り、播種したりする適期であるので管理の簡単な草花について二、三記してみよう。

オダマキ

(芋環、芋巻で花の形による名)いろいろの種類があり、みな宿根草で、

春種子を蒔くと、つぎの年から花が咲く。

春か秋ぐちに株分けもできる。我が国で昔

から庭に植えられるオダマキは、高山帯及

びその近くにあるミヤマオダマキから変つたものであるといわれ、花の色は萼も弁も

碧紫で弁の先に黄を含み、多年わかれに親しまれて来た品であり、白花のものもある。

古今集の一古へのしづのをだまき賤し

きもよきも盛りはありしものなり」の一首

は芋手巻の歌であるが、また一脈この草に通ずる所もある。また枝も葉もない枯木を

おだまきという由である。また山地にある

ヤマオダマキ(丈高く花は褐紫、弁先淡黄)

も時に植えられる。また渡来したものには

紫花、また園芸品には赤、薄桃、白などの

あるセイヨウオダマキ(歐洲原産、明治初年

渡來從來アメリカオダマキといふ)北米原

産でオダマキ属

の花弁の基近く

にある尾のよう

な距とよぶ部分

が非常に長く、

花の色の黄勝ち

なキバナナオダ

マキなどがあり、このキバナナオダ

マキは改良されて距の長い、花の色も桃、赤、紫、

青、バラ色など多彩なロングスパー。ハイ

ブリッドが生まれ、切花用にも花壇用にも

現今最も多く用いられている。これらを植

付ける土地は、軽い排水の良い腐植質の多

い砂質壤土が理想的で、陽地を好むが、夏

の暑い盛りだけは日盛りは半日ぐらいかげ

にしたい。花は札幌で五月末から六月で

一七、八月ごろまで晩れ花を見るが、見頃は

六月である。

ヤグルマギク

(矢車菊で花の形による)

一般にヤグルマソウと呼ばれているが、ヤ

グルマソウという草は他にあつて、それは

ユキノシタ科の多年草で深山に自生し、葉

の形が矢車に似るのでこの名がある。ここ

に述べるヤグルマギクはキク科の植物で、

名がこのように混同したのも、ヤグルマソ

ウの方が称えやすく、いつしか呼びならう

ようになつたものと思う。ヤグルマギクは

欧洲西南地方原産の一年草で碧色の美しい

花をつけ、欧洲各地では畠地に自生化して

いるという。萼も葉も花も一種の野趣があ

る。我が国には白井光太郎博士の日本園芸

切花として相当送られて来る。栽培品には

碧色の他白、薄桃などあり、いわゆる一重と

八重がある。暖地では秋蒔して春花を咲

かせるが、本道では春蒔して七、八月ごろ花

を咲かせる。直播は五月上旬、温床には四

月上旬ごろ蒔付ける。温床からの定植は六

月上旬ごろである。直播の場合、一坪当たり

半勺ぐらいの種子を要する。土質はあまり

選ばないが、肥えた所でないと十分な花が

咲かない。また雨が多い年には病害を被る

ことが多く、また茎を丈夫に育てないと風

雨で倒れやすい。ヤグルマギクの属には種

類がすこぶる多く園養される一年草に、ス

イートサルタンというベルシヤ原産のもの

がある。花は赤、後イタリアで白花が見出

され(一八九一年)て、この二つの間に交

雑が行われ、大輪のイムペリアリスとよぶ

品種が生まれ、花の色もスイートサルタン、

イムペリアリスとも白、赤、バラ色、桃色、

黄などの変化を見るようになつた。黄花の

ものを特にニアベオレンスと呼ぶが、この

品は性質が少し弱い。つぎにアメリカヤグルマまたはアザミヤグルマという中米原産

の丈夫な花茎の三寸以上になるものがあ

る。花は紫、桃、白で、見た感じはやや粗

だが、切花を投入などにすると、一種の

味がある。また宿根の種類には、欧洲原産

の碧色花、細長い葉のヤマヤグルマギク、

またアルメニア原産のキバナヤグルマ(俗

に黄金矢車)という丈の高い黄色大輪の花

を開く雄大なものなど四、五種があり、こ

とキバナヤグルマは切花としてよく用い

られる。いずれも株分(春秋)播種(春)

で育苗できる。

ふるるとはぜて内の種子をはね飛ばす草を少し山歩きしたほど的人は二度や三度目に少しこそかはこれと同属の一年草で、印度、マレー地方の原産、古く一条兼良（一四〇二～一四八一）の尺素往来に見られるので、少くも五、六百年前にはわが国に渡来したことであろう。花の色も形も草の様子も、わが国に自生の種類に較べると甚だしく華麗な草花といえる。ツマクレナイ、ツマベニ、ホネヌキなどいろいろの名があり、この種子はのどに魚の骨の立つたのを治す効があるといい、花は爪を染める時の料となるのでこれらのある。花の色も紅、赤、桃、紫、白などいろいろあり、一重咲は古くからあるが、この他半八重、八重があり、いずれも丈二尺五寸くらい、これらは庭先などに植えてもよく花を見れる。さらに椿咲といって丈一尺五寸どまりくらい、さらに重ねの厚い八重咲で茎頂の葉がすべて弁化して上向の花を冠様につけるものがある。花の色は赤、桃、紫、白、薄桃など。

一重や普通の八重咲のものに較べてあまりコッテリした感じもあるが、花壇植にはよい。ただ花着きに粗密の二系がある。これにはまた矮性で丈六、七寸のものがあり、

花が密着する。これは鉢植などするのに中旬直播してもよく、また一度作ると放つておいても毎年よく発芽生長開花するが、椿咲などでは四月中旬ころ、温床か鉢や箱に播種して育苗する必要がある。近ごろは四倍体品種もあるが、いまだ一般に作られることにはなつてない。種子を採るには実の緑色が少しさせてやや薄黄を帶びたころ、軽く掌の中に摘み取り、掌の中またはバケツや箱の中などで実をはせさせて殻を去り、種子だけにして乾す。多汁な殻は乾せ難く、雨でも降つて一、三日うつかりするとかびが生えて来ることがある。

立葵

タチアオイは一名ハナアオイ、カラオイ、ツユアオイ、オオアオイなどとよび、小アジアまたは中華原産の高さ七、八尺、茎葉とも粗毛のある二年または多年草、円柱状の茎を立て、円形で五~七浅裂、心脚をなす有柄の葉を互生し、その葉腋に一、二輪ずつムクゲ又はフヨウの花に似た花を長い茎の下から上までつけ、梢では種状をなして開花する。一重咲の品は色は黄または橙色、薄黄などで一重、八重があり、八重のものにはペオニーカーク、カーネーション咲、菊咲、王冠咲、ボール咲、などいろいろの系統があり、各系統にいろいろの品種がある。後種の花は黄、褐赤または万葉集にその名を見るほど古く伝来、蜀葵はこれの漢名、古い花卉または薬草の一

春種子を蒔けばその翌年の夏開花する。種子は五月初めごろ戸外の床または鉢や箱なはでな中にも鄙びた風情があり、わが国には万葉集にその名を見るほど古く伝来、蜀葵はこれの漢名、古い花卉または薬草の一につで、古くから往々アオイと呼ばれて全国に殆んどあまねく見られる。明治以来八重咲品が歐米から渡来しますます華美になつたが、八重咲品にも重ねの薄い厚いがある。千寿菊は一五九六年、万寿菊は一五七三年歐洲紹介されたといふが、わが國は前種は寛永（一六二四～一六三三）ごろ、後種は貞享（一六八四～一六八八）のころ伝えられたといふ。千寿菊、万寿菊の属にはさらに一年生のホソバコウオウソウ（ヒメコウオウソウ）多壊はあまり選ばぬが排水のよいことが望まろ一度五寸間隔に戸外の床に移植して育苗し、その秋または翌春定植するといふ。土壌はあまり選ばぬが排水のよいことが望ましい。タチアオイ属の異種にウスベニタチアオイ（ウスベニアルテア、ピロウドアオイ）という東欧原産丈三尺あまりの多年草で明治の初めごろ渡来した種類があり、これは観賞用の他、根及び葉を薬用とされる。タチアオイも根及び花を薬にされることがある。兩種とも庭に植られ、また切花用にも供される。

千壽菊と萬壽菊

メキシコ原産の一年草でキク科のマリゴールドのことであるが、千寿菊（センジュギク）は丈二尺五寸くらい、茎葉も花も大きく、アフリカン・マリゴールドとよび、万寿菊（マンジュギク）は丈一尺から一尺五寸くらいで茎、葉、花とも前種より小さく、クジャクソウ、コウオウソウ、フジギク（藤菊）などの名がある。前種には臭芙蓉、後者には万寿菊、紅黄草の漢名がある。いずれも葉は羽状に全裂して枝頭に頭状花をつけるが、前種の花は黄または橙色、薄黄などで一重、八重があり、八重のものにはペオニーカーク、カーネーション咲、菊咲、王冠咲、ボール咲、などいろいろの系統があり、各系統にいろいろの品種がある。後種の花は黄、褐赤、赤ま

たが、八重咲品にも重ねの薄い厚いがある。千寿菊は一五九六年、万寿菊は一五七三年歐洲紹介されたといふが、わが國は前種は寛永（一六二四～一六三三）ごろ、後種は貞享（一六八四～一六八八）のころ伝えられたといふ。千寿菊、万寿菊の属にはさらに一年生のホソバコウオウソウ（ヒメコウオウソウ）多壊はあまり選ばぬが排水のよいことが望まろ一度五寸間隔に戸外の床に移植して育苗し、その秋または翌春定植するといふ。土壌はあまり選ばぬが排水のよいことが望ましい。タチアオイ属の異種にウスベニタチアオイ（ウスベニアルテア、ピロウドアオイ）という東欧原産丈三尺あまりの多年草で明治の初めごろ渡来した種類があり、これは観賞用の他、根及び葉を薬用とされる。タチアオイも根及び花を薬にされることがある。兩種とも庭に植られ、また切花用にも供される。

千寿菊は摘心しないでもよく分枝し多数の花を着ける。千寿菊を切花の目的で作る時は初め五、六葉で摘心して必要な本数の枝を立て、且つその枝の側枝を摘み去り、花の数を制限する。これをせぬと短かい側枝が多數に出て花が貧弱になり、且つ茎が倒れやすくなる。採種するには異品種の混植を避けるようにせぬと、交雑容易なこの植物の品種の特性を保ち難い。千寿菊、万寿菊、ことに千寿菊には特異の臭いがあり、これが玉に疵であるが、最近この臭いの軽い、あるいは無くなつた系統のものがでなつた。（筆者は北海道大學理學部溫室主